



特定非営利活動法人

アジア・アフリカと共に歩む会

南アフリカ共和国貧困地域への教育支援

TAAAの活動日誌 2012年

- ・ 2012-12-18 [学校菜園で大きく成長した生徒たち](#)
- ・ 2012-10-16 [段ボール347箱が南アに出荷されました](#)
- ・ 2012-09-04 [南ア視察訪問記⑫生徒達の家庭を訪問](#)
- ・ 2012-09-01 [南ア視察訪問記⑪初体験：サッカー指導in 南アフリカ](#)
- ・ 2012-08-30 [南ア視察訪問記⑩ウグで定着した移動図書館車プロジェクト](#)
- ・ 2012-08-27 [南ア視察訪問記⑨本と畑で頭と体の栄養を](#)
- ・ 2012-08-23 [南ア視察訪問記⑧女子サッカー教室](#)
- ・ 2012-08-22 [南ア視察訪問記⑦英語の絵本が不足しています](#)
- ・ 2012-08-20 [南ア視察訪問記⑥オアシスのようなムチャレニ小学校](#)
- ・ 2012-08-17 [南ア視察訪問記⑤学校対抗サッカーイベント](#)
- ・ 2012-08-15 [南ア視察訪問記④本棚寄贈](#)
- ・ 2012-08-13 [南ア視察訪問記③バラエティのある休み時間](#)
- ・ 2012-08-12 [南ア視察訪問記②図書支援活動について](#)
- ・ 2012-08-11 [南ア視察訪問記①コンテナ図書室贈与式](#)
- ・ 2012-08-01 [図書クラブの設立・コミュニティーへ広がる図書活動](#)
- ・ 2012-07-25 [どこへいっても「イテンバ号」は大人気！](#)
- ・ 2012-07-15 [7月7日にTAAA報告会を行いました](#)
- ・ 2012-06-25 [西ケープ州エルギンからの移動図書館車運行レポート](#)
- ・ 2012-05-21 [南ア視察訪問記②](#)
- ・ 2012-05-15 [南ア視察訪問記①](#)
- ・ 2012-05-01 [地元の大工職人との出会い](#)
- ・ 2012-04-18 [3年目に入った菜園活動](#)
- ・ 2012-04-06 [石巻からいただいたお手紙](#)
- ・ 2012-03-29 [給食と学校菜園](#)
- ・ 2012-03-05 [高校に図書室を作りたい！](#)
- ・ 2012-02-16 [2月12日梱包作業＆ミニ講座のご報告](#)
- ・ 2012-02-15 [ワイルダー小のサッカー戦士たち](#)
- ・ 2012-01-28 [中1の女の子の詩“Let's heal the world”](#)
- ・ 2012-01-21 [TAAAの新しい仲間を紹介します！](#)
- ・ 2012-01-13 [1月8日にTAAA報告会を行いました](#)

・2012-01-10 石巻に本・ランドセル・人形を送りました

2012-12-18 南アフリカ

学校菜園で大きく成長した生徒たち



12月末で学校菜園プロジェクトは一旦終了します。活動を通して生徒たちの主体性が芽生え成長していきました。そして彼らの主体性こそが、学校菜園や地域での菜園普及活動を継続させるエンジンになっています。

菜園活動はすでに担当する生徒の学校生活の一部となっています。朝一で水やりと雑草取り、収穫をしてキッチンに運ぶなどの仕事をして、休み時間に次の移植用の土地を耕し、放課後にも世話をしながら帰宅しています。そのような生徒たちは、種や苗を持ち帰って家庭菜園を始めており、彼らが先頭に立って地域での菜園活動の広がりを促進しています。

ドウドウドウ地域のバボンギーレ小では、担当教師が病気欠席している間、育った苗を移植する作業を生徒たちだけの力でしっかりと行いました。生徒は「自分たちの畠」として責任を持って世話をしており、教師は、“学校を出ても仕事がなくぶらぶらしている若者が多い中、私の生徒たちはきっと将来畠仕事で生活して行かれるでしょう”と話していました。同校は前に菜園活動を行った経験がなく、事業開始時には敷地は全くの更地でしたが、現在は農業専門家が“インスピレーションな畠”と評価するほどに成長しました。教師や生徒の知識と技術の習得、興味と活動内容、すべてにおいて成果の出た学校の一つです。

(TAAA南ア事務所 平林薰)

[Page Top ▲](#)

2012-10-16 日本

段ボール347箱が南アに出荷されました



10月初旬に、私達が一年間梱包した荷物が横浜港からダーバン港に向けて無事に出荷されました。写真は発送直前に撮ったものです。合計段ボール347箱。英語の本15,671冊のほか、サッカーボール、算数セットが送られました。

今年は、インターナショナルスクールや個人の方々から、現地で最も必要とされている、小学生用の読みやすい小説や絵本がたくさん集まりました。

ご寄附をしてくださった皆様、梱包作業をしてくれたメンバーやボランティアの方々、本当にありがとうございました！ これからもどうぞよろしくお願ひいたします。

ダーバン港には、11月上旬に到着する予定です。それから、トラックで約2時間かけてウグ郡のTAAA南ア事務所に輸送されます。

11月からは、来年の出荷に向けて梱包作業をしていきます。

今後ともご協力をどうぞよろしくお願ひいたします。

(久我祐子)

[Page Top ▲](#)

2012-09-04 南アフリカ

南ア視察訪問記⑫生徒達の家庭を訪問



空手デモンストレーション

インプレメロ小学校で移動図書館車の貸し出しが終わり、下校の時間になりました。お祈りの集会です。先生たちからの強い要望があり、来住さんが皆の前で空手を披露することになりました。南アでは空手はサッカーと同様に人気があり、生徒たちは来住さんの一挙手一投足をじっと見つめていました。

タレンテ君のお家訪問

学校菜園プロジェクトが3年目を迎えるころ、生徒たちは、驚くほど主体的に活動するようになってきました。ほとんどの学校に菜園クラブができ、メンバーたちは学校菜園に関わるだけでなく、菜園技術と知識を家庭にもちかえり、小さな菜園を作ったり、保護者や近所に教えたりするようになりました。生徒たちを通して、学校菜園から家庭菜園へと、菜園活動がコミュニティーに広がりつつあります。

インプレメロ小も、菜園クラブのメンバーを中心にコミュニティーへ菜園活動を広げている学校の一つです。今日は訪問最後の日とあって、菜園クラブで活躍するタレンテ君のご自宅を訪問することになりました。

タレンテ君は、ドラえもんに出てくる「出木杉くん」です。菜園だけでなく、勉強、スポーツ共に万能で、友達思いのリーダー格。名前も「才能」です。賢そうな彼を見て、どこにでも「出来杉くん」はいるのだなと思いました。

タレンテ君は、おばあさんと若い叔父さん、そして数人の兄弟と暮らしていました。裏庭に小さいけれどしっかりとした家庭菜園がありました。叔父さんは英語も堪能で聰明そうな方でしたが、失業中のことでした。仕事に出ていたおばあさん一人が、かろうじて一家を支えている様子です。

ウグ郡のような南アの遠隔地域には、働き盛りの男性の雇用はほとんどありません。かといって都会に出てても、安定した職につくには、技術や知識が必要で、ウグの高校を出ただけでは、やはり職にあぶれてしまいます。若年層の失業問題は、南アが抱える大問題で高い犯罪率にも直結しています。

現状は非常に厳しいものがあり、無責任な楽観論は述べられませんが、タレントくんたちが学校を卒業するころには、若者たちが地元で自活できるにかしらの道が、ここウグで拓けることを切に願います。そして、TAAAの現行の菜園活動や図書活動が、たとえ間接的であれ、道を拓く一助になれば、望外の喜びです。

(2012年8月視察訪問記 終わり)

(久我祐子)

[Page Top ▲](#)

2012-09-01 南アフリカ

南ア視察訪問記⑪初体験：サッカー指導in 南アフリカ



サボーナ！！（こんにちわ！）

8月1日～9日の間南アフリカに行き、サッカー教室をしてきました！

私は、日本でサッカーのコーチをやっていますが、海外の子供たちを教えるのは初めてのことです。

この話しを森さんから受けたとき、こんなチャンスはないと思い受けました。

南アフリカのイメージは、ジャングルでどっから動物が出てくるか分からない、自然豊かなところ。と思っていたら、、、

山はサトウキビ畑で、ジャングルどころか森などなく（森さんは居たが）、あれ？沖縄？なんて思うくらいのサトウキビ畑！
アパルトヘイト時代の面影だとか。

サッカー教室はというと、、、南アの子はとっても元気！

ボールを蹴ることをとても楽しんでいました。

指導は、日本語→英語→ズールー語でやりました。通訳通してやると時間のロスが多い。こればかりはしょうがないが、子供たちは集中して聞いていました。

南アはトレーニングの習慣がないそうで、ちゃんとしたトレーニングは初めて。それでも、普通にこなす姿を見て南アサッカーの将来の可能性が見えました。

グラントはでこぼこ。ある学校は傾斜があるグラント。今の日本の学校はとことん恵まれている。普通に通っていた学校は、あらためて恵まれていたのだと感じました。

しかし、そんなグラントでサッカーをしている子供たちはとても技術がありました。その技術は、グラントのおかげで身についたもの。

これにトレーニングメニューをこなせば！

可能性に満ち溢れた子供たち。

この子供たちに私たちが少しでも力になれればという思いで、今後もTHAN球プロジェクトを活動していきますので、今後もご支援よろしくお願いします。

(THAN球プロジェクト 堀田浩平)

[Page Top ▲](#)

2012-08-30 南アフリカ

南ア視察訪問記⑩ウグで定着した移動図書館車プロジェクト



インプレメロ小学校では、移動図書館車による本の貸し出しと、サッカーの基礎トレーニングの紹介をしました。

昨年の8月に視察訪問をした時は、図書活動が導入されたばかりで、学校訪問の度に移動図書館車による第一回目の本の貸し出しを行いました。生まれて初めて図書を借りる子供たちの大きな笑顔に出会いました。それから1年を経て、本の貸し出しあはすっかり定着し、移動図書館車イテンバ号は人気者として生徒たちの生活の一部になっているといった印象をうけました。

われ先にと本を返却しようと、窓に本を差し出す子供たちにマイケルは「一人ずつだよ」とたしなみます。貸し出しあは、全員の返却が終わってからになりますが、「早く借りたい」とイテンバ号の前でワクワクしながら待っている子供たち。イテンバ号には、平易な英語で書かれた薄い本や、つい手に取りたくなるような魅力的な絵本がたくさん置かれています。返却が終わるやいなや、生徒たちはバスの中に乗り込み、一番の宝物を探すように、目をきょろきょろさせながら本を選んでいきます。

図書室のないインプレメロ小でも、コンテナ図書室を寄贈しました。私達のこれから課題の一つは、学校の図書室も親しみやすく魅力的な本でいっぱいにして、イテンバ号と同じぐらいの人気者にすることです。

イテンバ号から少し離れたところで、テンバこと森さんたちが、サッカー好きの男子たちは基礎トレーニングを教えていました。インプレメロ小学校は、支援対象校の中では比較的町に近い場所に位置しますが、ここでも基礎トレーニングマニュアルは初めての経験で、コーチの先生も「このようなことをしたことはない。とても参考になる」と興味深く見つめていました。昨年はここで女子のサッカー交流をしたこともあり、女子もやりたそうにうずうずしていました。

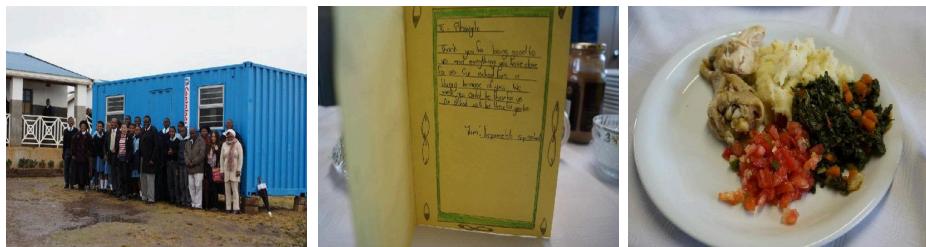
雨上がりの放課後、イテンバもテンバも大活躍でした。

(久我祐子)

[Page Top ▲](#)

2012-08-27 南アフリカ

南ア視察訪問記⑨本と畑で頭と体の栄養を



視察訪問最後の日は豪雨の中、ブンガシェまで車を走らせました。ベカメバ高校でコンテナ図書室贈与式が行われました。ドラミニ所長は式典とあって、一段とほりきってスピーチをしてくれました。氏は、どの贈与式でも一貫して本を読む大切さを訴えていますが、その学年に合わせて話す内容を変えています。

今回は高校高学年の出席者が多かったので「正直にいっておく。本は難しくて、読むことは大変な時もある。でも、You must read！」そしてネルソン・マンデラ氏に触れて「長いこと牢獄から解放されたとき、マンデラ氏は世界の情勢を全て知っていた。読書をしていたからだ。本から必要な全ての知識を得ていたのだ。」

ベカメバ高校は生徒数442人の大きな学校です。しかし、今まで図書室はありませんでした。今回贈与したささやかなコンテナ図書室が、彼らにとって初めての学校図書室になります。

南アが新しい民主主義国家に生まれ変わった当初、南アのある教育N G Oスタッフがいった言葉を思い出しました。「学習する者にとって、本は食べ物のようなもの。食べ物がなく育つことを要求されるはどれほど過酷なことか」と。しかし20年たった今も、南アの遠隔地域の高校では、相変わらず生徒達は「食べ物」がない状態で、成長することを求められているのです。

強い雨の中、聰明そうな生徒達にかこまれて「せめてコンテナ図書室をいつも魅力的な本でいっぱいにしてあげたい。」と強く願いながらの記念撮影になりました。

ベカメバ高校を後にして、ヒバディーン地域に戻り、インプレメロ小学校を訪問しました。急遽訪問することになったにも関わらず、学校菜園でとれたヘルシーなランチで暖かく私達一行を迎えてくれました。菜園プロジェクトで定期的に行っている研修では、菜園技術や知識だけでなく、収穫物の応用として、健康によい伝統的な野菜の調理方法や栄養知識も学びます。

インプレメロ小の菜園担当のンソミ先生は、採れたての、ほうれん草、にんじん、タマネギ、トマトを使ってその一例を披露してくれました。スパイスやコンソメをあまり使わずに、野菜本来のおいしさが引き出されていました。ほうれん草の料理はあまりにも美味しかったのでレシピを書いてもらったほどです。

ランチのテーブルには、T A A Aのプロジェクトマネージャー“シボンギレ”への手作りの“Thank you”カードがいくつも置かれていました。

(久我祐子)

2012-08-23 南アフリカ

南ア観察訪問記⑧女子サッカー教室



バボンギーレ小では、女子対象のサッカー教室をしました。

この学校に、以前サッカーボールを寄贈したら、男子と女子でボールの取り合いっこが始まりラグビー状態になったそうです。最後まで女子は男子に負けずに粘ったとか。このように特に女子が活発なので、先生から女子へのサッカー教室を開くようにとのリクエストがありました。

今回は私も元気なバボンギーレ女子に混じってサッカー教室に参加しました。最初のランニングから元気いっぱい、森さんと堀田さんを抜かそうとかけっこ状態に。日本だと、女の子は小学校高学年になると、男の子の目を気にしてきますが、ここの女の子は、スカートで思いっきり飛び跳ねたり駆け回ったりと自然体です。

2列になって、基礎トレーニングの開始です。私は森コーチの列につきました。

コーチが投げるボールを足でとめてから蹴ったり、とめずに蹴ったりと基礎的な練習でしたが、生まれて初めてサッカーをする女の子たちは毎回がワクワクドキドキ。実は、私自身もサッカーを習うのは初めての経験だったので、必死でした。

後ろで見ていた女の先生たちにも声をかけて、参加してもらいました。見学している男の子たちは、先生たちがどのようなプレイをするのか興味津々です。練習メニューはだんだん難しくなつていき、最後は、ジグザグに動くドリブルでした。「これはやばい」と思ったら案の定、私は転びそうになり、地面に手をついてしまいました。大勢の男子生徒が心配そうに見守っていました。穴があれば入りたいくらい恥ずかしかったです。地面がでこぼこなのにかかわらず、女の子達は一人も転ぶことなく、うまくかわしてきました。普段から鍛えられているのだなと思いました。

終わった後で先生たちは「サッカーは生まれて初めてだったのでとっても楽しかった」といつてくれました。ドリブルの練習で一人転んだ私が悔しがっていると「気にしないの。あなたは全力を尽くしたじゃない。」「サッカーはね、転びながらうまくなるのよ。あなたは転んだ分、うまくなつたのよ」と励ましてくれました。一緒に練習をした女子たちも「大丈夫だよ」という笑顔を向けてくれました。

すっかり励まされる対象になってしまった私ですが、先生たちのやさしい励ましの言葉から、彼女たちが日頃生徒達にどのように接しているのかが分かり、改めて「いい学校だな」と、暖かい気持ちになりました。勉強がうまくいかない生徒が先生から「失敗の分だけ、賢くなったのよ」といわれたらどれだけ気持ちが楽になり励まされるでしょう。生徒達もまた励まし合っているのでしょう。

練習の後は、森チームと堀田チームに分かれて試合が始まりました。みんなでボールを追いかける団子状態でしたが、お互いに1点ずつ入れてPK戦に突入。すると今まで他のボールで遊んでいた男の子達が一同に集まってきた。そして、女の子がシュートをする度にその子の名前を呼んで声援をおくり始めました。「何々ちゃん、がんばれ、がんばれ」という風に。この地域の男の子たちの女の子に対するやさしい態度にはいつも感動します。

試合は森チームが勝ち、森チーム女子は飛び上がって喜び、堀田チーム女子は、本気で悔しがっていました。あいにくの悪天候で雨の中でのプレイでしたが、みんな元気いっぱいでした。

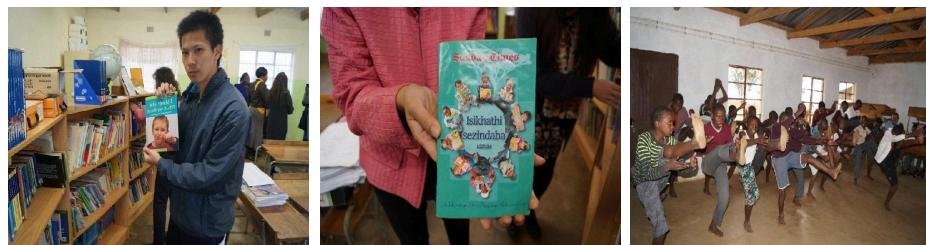
MVPのメダルをゲットしたのは、ゴールキーパーをした元気な女の子。やったね！
来年もまたサッカーやろうね。私も今度は転ばないからね。

(久我祐子)

[Page Top ▲](#)

2012-08-22 南アフリカ

南ア視察訪問記⑦英語の絵本が不足しています



次に訪れた学校は、バボンギーレ小学校です。ここは「シニア・プライマリ」といって、日本の小5～中1までの学校で、生徒数110名に教師4名という小規模な学校です。
くねくねした未舗道を通ってたどり着くと、女の子達が思いっきり、でこぼこの校庭を走り回っていました。この地域の児童は男の子も女の子も本当に元気です。

この小学校には図書室があり、私達は移動図書館車で運んできた新しい本棚を図書室に運び込みました。教室ぐらいの大きさの図書室で、本棚には程度本が並べられていました。小さな学校でのこのスペースと冊数は、この地域では、とても恵まれていると思いました。

しかし、本を手にとって調べてみると、子供たちが喜びそうな魅力的な本はほとんどなく、また、かなりの読解力を必要とする本が多く、とても生徒達のレベルに合っているとは思えませんでした。

今回の視察で心配になってきたことは、この地域の生徒達の英語力です。ウグ郡のような遠隔地域は、本だけでなくテレビやラジオに触れる機会が少ないため、都会の子供たちと比べると育つ段階で英語に触れる機会が圧倒的に少ないのです。

バボンギーレのようなシニア・プライマリでも、図書室にはジュニア用の薄い英語の本をたくさんおいて、先ず英語の本を読むことに自信をつけさせることが大切なのは、と思いました。現行の移動図書館車プロジェクトで生徒達に貸し出しをしている様な、読みやすい魅力的な本を図書室にも沢山並べてあげたいと思いました。南アの場合、基礎的な英語力は、学力の基盤になるので、

それが揺らいでいるとしっかりと学力が育たず、学年が上がるにつれ大きなハンディキャップとなります。

図書室には、ズールー語の本も何冊かありました。南ア社会では、母語と英語ができることが当たり前のように要求されますが、教育リソースが絶望的に不足している遠隔地域においては、2つの言語の読み書きをマスターすることは当たり前どころか至難の業です。あまりにも大きなハードルです。これからも私達が、ハードルを少しでも低くできるように教育環境を改善する一助になれば、こんなに嬉しいことはありません。

今後とも皆様のご協力をどうぞよろしくお願ひいたします。特に英語の絵本は大歓迎です！

別の教室では、学校対抗のカルチャー・コンペティションに向けての男の子たちが高く足を蹴り上げる伝統的なズールーダンスの練習をしていました。子供たちの迫力にはいつも圧倒されます。

(久我祐子)

[Page Top ▲](#)

2012-08-20 南アフリカ

南ア視察訪問記⑥オアシスのようなムチエレニ小学校



滞在5日目の8月6日（月）は、ドゥドゥドゥ地域の学校2校を訪問しました。最初に訪れた学校は、昨年も視察訪問した、ハイレベルな菜園のあるムチエレニ小学校です。ドゥドゥドゥ地域の中でも、たまに伝統的な民家が見えるぐらいの人影もない奥地に、オアシスのように存在する素敵な学校です。通学圏は相当広範囲なのでしょう。在校生徒数571名の大きなフルプライマリーの小学校です。

私達が到着すると、校長室に招かれお茶をごちそうになりました。笑顔のフレンドリーな校長先生です。自宅はヒバディーンのTAAAの南ア事務所の近くにあるらしく、プロジェクトマネージャーの平林（ズールー名：シボンギレ）がスーパーで買い物をしていると、時々、この校長先生から「シボンギレ！」と遠くから驚くほど大きな声で呼び止められるそうです。

南アフリカの遠隔地域では、校長先生の異動がほとんどなく、同じ校長先生が長年一つの学校を務めます。よって、学校の雰囲気、管理能力や教育力は、校長先生の力量に大きく左右され、同じ地域内でも、学校間格差が生じてしまうようです。

ムチャレニ小学校は、かなり立ち後れた困窮地域にありますが、校長先生の人間力なのでしょう。マネジメントがよく、他の先生たちも有能で気持ちよく能力を発揮しているとのこと。TAAAが関わっている菜園や図書活動も大変活発に行われています。

菜園に行くと、あいにく生徒達はいなかつたのですが、菜園の世話係をしている地元住民が、黙々と働いていました。かなり大きな菜園で、一部は「生徒達の畑」として彼らに任せられています。

す。ここでも「特に男の子が一生懸命」だと聞きました。

ムチエレニ小は、長年菜園活動を独自に行ってきました学校ですが、TAAA菜園プロジェクトに参加するようになり、パーマカルチャーの技術を学び、野菜の質が一段とよくなつたと、菜園を案内してくれた先生が伝えてくれました。

教育センター所長のドラミニ氏の音頭で、コンテナ図書室の贈与式が行われました。プロジェクトマネージャーの「シボンギレ」は、スピーチの前半はズールー語で生徒達にやさしく話しかけていました。私は、「ズールー文化が大切にする“Joy”“Share”“Respect”的3つの美德を図書活動に生かして、素敵な図書室を作つて下さい」と伝えました。

校長先生のスピーチは短く、代わりに歌で喜びや感謝の気持ちを表してくださいました。校長先生が歌いはじめると、生徒達も立ち上がって、体を揺らしながらの合唱になりました。

小学校の生徒達にとって、長い「校長先生のお話」よりも、自分たちと一緒に歌ったり踊ったりしてくれた方がどれほど気持ちをシェアできるでしょう。「日常生活に歌や踊りのある文化は素敵だな」と思いました。私達も歌に参加して喜びを共にしました。

しかし、生徒数571人に対し、コンテナ図書室はスペースが不十分です。近い将来、この学校で、大きめの本格的な図書室が設置され、充実した学校図書活動が行われるようになってほしいと願いました。そして、いずれは、卒業生や保護者を始め地域住民も利用できるコミュニティーに開かれた学校図書室に発展していくと素敵だなと思いました。

(久我祐子)

[Page Top ▲](#)

2012-08-17 南アフリカ

南ア視察訪問記⑤学校対抗サッカーイベント



前回は「図書館」について書いたので、今回は「サッカー」について書きます。この視察訪問で1番の大きなイベントだったサッカーイベントを中心にして書いていこうと思います。

このイベントには、小学校2校・中学校2校・高校2校を招きサッカー練習や試合を行いました。イベントの練習メニューを作成することにあたって1番重要にしたのは、サッカーの練習を行つたことのない子供たちにサッカーの面白さと向上心を持ってもらう事でした。

去年、南アに行ったときに先生から聞いたお話が今でも印象に残っていることは「試合は行つてゐるが練習は行つてない」という事でした。その背景には、指導者が練習メニューを知らない、サッカーボールが少ないので出来ないということでした。

サッカー先進国では、当たり前のことが行われていることがここでは行われないことに驚きました。

話をイベント当日に戻します。

最初に行った練習メニューは、2人1組になり1人はキッカー・1人はスロワーになり、インサイドキック・アウトサイドキック・モモトラップ・胸トラップ・ヘディング・ジャンプヘッドの練習でした。

初めてやる子供ばかりだったので、成功例と失敗例を何度も繰り返しながら子供に見せて上手くなるように努めました。

みんな、初めてみる練習メニューばかりなので食い入るように見ていました。



その次に、学校対抗のリレーを行いました。

リレーは4種類で、走り・ドリブル・手を使ってボールを上に運ぶ・下に運ぶを行いました。

みんな、学校対抗ということもあり1位を目指して頑張っていました。

1位になったチームの盛り上がり方は、日本とは比べられないほどすごいものがありました。たぶん、サッカー以外での勝負は初めてだったからではないかと思いました。

ここで、休憩を挟み2つのブロック（高校生以上・中学生以下）に分けてPK練習と練習試合を行いました。ここからは、MVPの対象になるので子供たちの表情はより一層引き締まっていました

また、PKと練習試合の間にはグランドのゴミ拾いを行いました。

まず、みんなを集めて「なぜ、ゴミを拾う事が大事なのかわかる人？」という質問をするとみんなが顔見回している。一人の子が、真剣な目で「リサイクルするため」と言った。確かにそれも一理ある。その後、誰も手を上げないので答えを言おうとした瞬間1人が手を挙げた「グランドを綺麗にして、怪我を防止すること」。私が言おうとした言葉を言ってくれた嬉しかった。みんなも、納得をしてゴミ拾いを行ってくれた。南アでは、ゴミ箱がないのでゴミ箱に捨てる習慣がほとんどないということにはがっかりしました。

その後、学校対抗の練習試合を行いました。この試合では、MVPも関わっていることもありみんな一生懸命頑張っていました。どの子にMVPにするか凄く迷いました。

試合後には、勝利チームに新品サッカーボールの進呈と各チーム1人にMVPの記念メダルの進呈を行いました。

メダル貰った子もそうでもない子も、みんな終始笑顔でサッカーを行ってくれたことが何よりも成功であり、より一層サッカーを楽しんでくれたのではないかと思いました。

(森直之)

南ア視察訪問記④本棚寄贈



次に訪れた学校は、同じくヒバディーン地域にあるテュルベケ小学校です。生徒数144名、6クラスの小さな学校です。図書室のあるこの学校には、本棚を寄贈しにいきました。ここでも、ドラミニ氏の計らいで、急遽、簡単な贈与式をすることになりました。

司会のドラミニ氏が、“You Must”と声を張り上げると、皆は“Read！”と続きます。伝道師と信者のように、これを何回も繰り返しました。

私は、支援対象校の生徒達が「自分たちは海外から支援を受けている子供」という意識を持つてもらいたくなかったですし、常日頃、TAAAはさりげないサポーター的、縁の下の力持ち的な存在で、南アで表だった自己アピールをしたくないと思っていましたので、毎回の式典スピーチで、TAAAの紹介は省き、生徒達に「主人公はあなたたち」のメッセージを伝えました。この学校でのスピーチでは「これらの本棚は、メイド・イン・ウグで、地元のバーナードさんというすぐれた木工職人の手によって、丹精こめて作られたものであること」を、最初に伝えました。

ドラミニ氏や校長先生は代表の生徒達に熱心に読書の大切さを伝えました。彼らに賢くなつて将来しっかりしたリーダーになってもらいたいという熱い思が伝わってきました。

ドラミニ氏は私達を紹介する時、必ず「日本からのゲストは、南アでズールー名に改名して、南アにいる間はズールー名を名乗ります。私も日本に行くと日本名を名乗ります」と生徒達に伝え、生徒達は面白そうに私達の改名を聞いてくれます。ズールー名での自己紹介は、生徒達と私達の距離をぐっと縮めてくれるようです。

ドラミニ氏に、「自分に日本名をつけてくれ」と頼まれましたので、「太郎さん」と命名させていただきました。気に入ってくれて「タロウ、タロウ」と嬉しそうに繰り返してくれました。中央の写真は、本棚を一緒に運ぶ「テンバと太郎」のツーショットです。

小さな校庭に一つだけ遊具があり、子供たちが遊んでいました。「イブシソ」こと堀田さんが、ぐるぐる回してタッチをすると、子供たちが大勢乗ってきました。さすがスポーツマンのイブシソです。それでも負けずに、何度も何度もぐるぐる回してタッチ！子供たちは大騒ぎ。これから2時間ぐらいかけて帰宅するのでしょう。日本からきたお兄さんと大はしゃぎをして過ごした放課後の楽しい一時でした。

(久我祐子)

2012-08-13 南アフリカ

南ア視察訪問記③バラエティのある休み時間



シボングジュケ高校の菜園を訪問すると、数人の男子生徒達が私達の急な訪問に気を取られることなく、馴れた手つきで、黙々と畠仕事に励んでいました。その姿は、ファーマーそのものです。

「菜園活動は盛んですよ。特に男子が一生懸命なんです」と校長先生。「特に男子が一生懸命」なことは、学年を問わずにいえることのようだ、対象校を訪問する度に、菜園担当教師たちから聞かされました。

伝統的には、「菜園は女性の、特におばあちゃんの仕事で、男がやるのはかっこよくない」という偏見が根強いこの地域において、男子生徒たちが菜園活動に主体的に取り組むようになったことは、学校という新しい価値観も育む教育現場で菜園活動を導入した成果なのだと改めて思いました。

校長先生は、地域の発展に熱心なアイディアマンで、「ここは農業に適した土壌をもつ、可能性を秘めた地域です。将来的にはエコツーリズムなども栄えるといいと思っています」など、この土地に残って若者達が仕事作りができる可能性を熱っぽく語ってくれました。

サッカー指導者の森直之さんと堀田浩平さんが、急遽、男子たちとサッカーをしてくれることになりました。そしてその隣の空き地では、女子がユニフォームに着替えて、迫力のあるネットボールを開催しました。

菜園、サッカー、ネットボールと、それぞれの好きなことに熱中できる休み時間です。TAAAのささやかな支援は、まだ十分ではありませんが、生徒達のアクティビティの選択を確実に広げ、休み時間も有効に過ごせる手助けをしていることが分かり、とても嬉しくなりました。

(久我祐子)

[Page Top ▲](#)

2012-08-12 南アフリカ

南ア視察訪問記②図書支援活動について



今回、私たちは3つのキーワード「サッカー」「図書室」「菜園」を軸にして南ア視察訪問を回りました。私は、「図書室」と「サッカー」を担当しました。私が、この2つのキーワードで1番意識したのは「去年との違い」です。今日は、「図書室」についてまとめます。

今回1番の仕事は、コンテナ図書室の贈与式でした。

贈与式は3校の学校で行いました。式典では、ブンガシェ教育センターのドラミニ所長、学校の校長先生や図書指導員、TAAA代表の久我さん、プロジェクトマネージャーの平林さんが、子供たちに「本を読む素晴らしさ」を伝えました。その中で私が印象に残っている言葉は、久我さんがおしゃっていた「図書館プロジェクトは、私たちでのプロジェクトではなく、あなたたちのプロジェクト」です。これには、子供の顔も変わりこれから頑張って図書の仕事を従事しようという決意が、表情っていました。

その次に、本棚を製造しているバーナードさんの工房に行き、今後は本棚のキットを作って頂き、子供たちに組み立ててもらう形を取ってもらうようにお話しました。バーナードさんは自立支援に熱心な方で、この話に凄く興味をもっていました。また、「地域の若者には、自分の手で何かを作り出すことの大切さ、そしてそれが生活の糧となることを教えたい。若者は若者同士で学び、仕事をし、活動するのがいいからね」というお話を伺いました。

その後、TAAAのオフィスに戻り去年届いた段ボール348個の整理を行いました。1つの段ボールには、本が30冊以上入っております。その本を、種類毎に分けて、パソコンに本の情報を打ち込む一連の作業は1つの段ボールで40分以上かかります。その作業を、平林さん・マイケルの2人だけでやっているということ。

私も、一連の作業を行ったものの段ボールに入っている本の種類がバラバラで仕分けるのが大変でした。今後、日本で行う梱包作業の仕組みを変えたほうがいいなと思いました。

また、最終日には移動図書館の運転も行いました。舗装されていない道路を運転するのは、すごく難しくて集中力がいるなと思いました。改めて、マイケルのドライブテクニックの凄さに触れることが出来ました。そして、素人ながら思ったことは、ブレーキが凄く弱かったのではということです。今後、修理が必要だなと思いました。

話を戻して、去年の違いの事について話をすると。1番変わったことは、子供たちが英語の本に触れる機会が多くなったことです。私たちが、活動している地域はTVやラジオが繋がっていない地域が多く、そのような地域で、移動図書館車は絶大な人気があり子供から先生まで笑顔になって本を借りていきます。それは、凄く嬉しいことです。しかし、図書室のある学校はほとんどなく、あっても本棚には本の数が少なく、レベルに合っていない本が並んでいるというのが現実であり、今後の課題であると感じました。

また、先ほどと同じことを言いますが、式典で教育センター長のドラミニ氏や校長先生達が「読書の大切さ」を伝えたのが、子供たちにとって大きな刺激になったのではないでしょうか。

南アフリカにとって、英語は公用語（他に地域毎に10の言語）であります。日本と違って、大人になって英語をしゃべれないと置いていかれて就職をするのに困難になります。子供たちの時から、英語に触れることが大切だと改めて感じました。

(森直之)

2012-08-11 南アフリカ

南ア視察訪問記①コンテナ図書室贈与式



8月2日から6泊7日で私を含むメンバー3人が、TAAAのプロジェクトサイトである、ウグ郡3地域の学校を視察訪問しました。

最初に訪れた学校は、ヒバディーン地域にあるシボングジケ高校です。生徒数139名6クラスという小さな学校です。今年度は、一般財団ゆうちょ財団の国際ボランティア貯金の助成金によりジュニアプライマリーから高校30校の図書環境を設備面で改善しています。図書室を設置するスペースのない学校にはコンテナ図書室を寄贈しており、シボングジケ高校にもつい先日コンテナ図書室が設置されました。

当初の計画にはなかったのですが、急遽、ブンガシェ教育センターのドラミニ所長の計らいで、日本からのTAAAメンバーの訪問に合わせて、贈与式が行われるようになりました。

高校に着くと、生徒達が一生懸命、コンテナ図書室を掃除したり、本を並べたりしていました。皆ワクワクしています。式典の部屋に入ると、図書メンバーの生徒たちと先生が席についていました。ドラミニ所長、州教育省の役人、校長先生、SGB(PTA)メンバー代表、プロジェクトマネージャーの平林さん、私は前に座り簡単なスピーチをすることになりました。

司会進行役のドラミニ氏は始終「本を読むことの大切さ」をユーモアも交えて熱っぽく語りました。「朝、昼、晩と本を読むのです。“You must read” 朝起きても、“You must read” 寝る前も“You must read” でも、シャワーを浴びる時は本が濡れないように気をつけてね」氏の毎回の“You must read”的後に、全員が“You must read”と復唱します。

私は最初に、森さんのズールー名が「テンバ」、堀田さんは「イブシソ」、そして肝心の自分のズールー名は忘れたことを告げました。会場から拍手と笑いが起きたところで、「TAAAは、コンテナ図書室は用意させていただきました。今後、本もできるだけ多く届けるようにがんばります。教育センターのドミサニ氏もがんばります。でも、場所と本だけでは図書室は成り立ちません。図書室は、本を借りる人、司書、管理する人がいて、初めて成り立ちます。図書室を作っていくのはあなたたち生徒で、これはTAAAのプロジェクトではなくて、あなたたちのプロジェクトです」と生徒達の方をみて簡単なスピーチをさせていただきました。

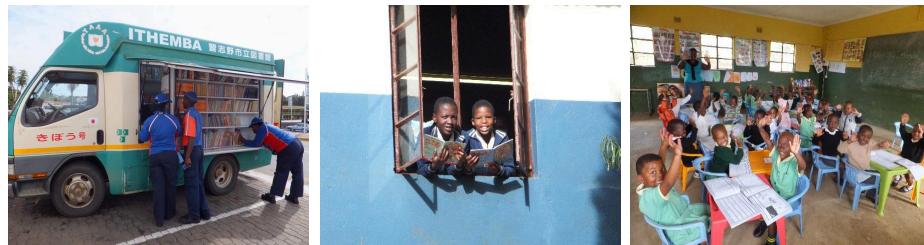
式典は美しいコーラスとお祈りで終了しました。

式典の後は、コンテナ図書室に戻りテープカットをして、みんなで記念写真をとりました。この時の言葉も「チーズ」ではなく、「Read」でした。

(久我祐子)

2012-08-01 南アフリカ

図書クラブの設立・コミュニティーへ広がる図書活動



図書クラブの設立

司書教師が活動の進め方を少しずつ理解してきたことや、蔵書も増えてきたことから、各対象校では、図書クラブを設立したり、授業で読書の時間を設けるなど、図書活動の定着と発展が見られるようになってきました。司書教師の役割は大きく、継続的に適切なアドバイスやモチベーションを与えてあげることが必要だと認識しています。

コミュニティーへの本貸し出し

地域内のガソリンスタンドの従業員に対する本の貸出もし始めました。

地域内には本屋はなく、公共の図書館もないか、あってもアフリカ人住民は利用したことがない場合が多く、本に親しむ機会を持てずにいます。家庭の生活は厳しく、子供に本を読む環境を作ることが難しいため、学校が唯一の場であることから、学校図書室の整備は緊急課題です。しかし、その一方で、学校の生徒たちだけではなく、学校にいっていない失業中または働いている地域の若者にも、本に接する機会を提供していきたいと思っています。

(TAAA南ア事務所 平林)

2012-07-25 南アフリカ

どこへいっても「イテンバ号」は大人気！



ウグ郡の2地域（ドゥドゥドゥ・ヒバディーン）の20校を対象に、2011年に開始した図書支援活動は、2012年度も順調に進んでいます。各校一学期に2回ずつ訪問、貸出しと返却を行っていますが、生徒数が多い学校では一回に一学年のみしか対応できないため、返却時に新たに他学年に貸出しを行い、できるだけ多くの生徒に読書の機会を与えるようにしています。

TAAAは、日本国内のインターナショナルスクールから良質の理数系の教科書を沢山寄贈してもらっているため、現地の高校からは、「日本から寄贈された本はすぐに授業に活用できるものが多く、とても役に立っている」との嬉しいコメントをもらっています。現地で購入するズールー語の本も、とても喜ばれています。

村に公共図書館がなく本屋さんも一件もないこの地域では、移動図書館車による本の貸し出しは、生徒達が教科書以外の本にふれる唯一の機会です。

小学校でも、生徒たちはバスの到来を楽しみにしており、まだ自分たちで借りることのできない低学年の生徒たちも集まってきて興味深そうに眺めています。

このように移動図書館車「イテンバ（希望）号」は、今年度も大人気です。

(TAAA南ア事務所 平林)

[Page Top ▲](#)

2012-07-15 日本

7月7日にTAAA報告会を行いました



7月7日（土）、広尾の「JICA地球ひろば」にて、TAAAの報告会を行いました。

ここ最近は、1月に埼玉で、夏～秋に東京で、南ア事務所代表が帰国するタイミングに合わせて開催しています。また、前回まではゲストを招いての2講演スタイルをとっておりましたが、今回はプロジェクトの報告にしづらって十分な時間をとりました。

TAAAは今年で創立20周年であり、当初は教育支援からスタートいたしましたが、現在は教育、農業、サッカーヘとその分野を拡充しています。いずれも学校やそのまわりのコミュニティーがキーとなっていますが、それぞれの分野の報告を数多くの写真とともにに行いました。

現在TAAAは、南アフリカ共和国クワズールー・ナタール州ウグ郡の3地域（プンガシェ、ドゥドウドゥ、ヒバディーン）でプロジェクトを実施しています。南ア事務所代表かつプロジェクトマネージャーの平林薰は各学校の先生方と本音で話し合う関係を築いており、それだけにきめ細かくサポートしたいというパッション（情熱）をもって活動しております。

まず、農業（学校菜園）関係の報告がありました。プロジェクトは順調に進んでおり、豆・芋・カボチャなど、様々な野菜が学校で育てられています。活動の特徴としては、単に野菜を育てるだけでなく、生徒たちに栄養を考えさせる機会を設けたり、農業専門家であるリチャード・ヘイグ氏の農場訪問実習（生徒・先生への研修）を企画したり、農業展覧会への参加機会を与えたりするなど、様々なイベントを絡めています。その一方で課題もあり、水不足や水過多の地域があったり、牛や猪などに収穫前の野菜を食べられてしまったり、ということもありました。しかしながら、収穫された野菜は給食に使用され、余ったものは販売することで学校の資金となり、さらには生徒たちが将来就農する可能性も開けています。

次にサッカー関係の報告がありました。こちらは、「T H A N球プロジェクト」とタイアップし、サッカーボールの寄贈を行なっているものであります。学校訪問の際、TAAA現地スタッフであるマイケルがサッカーの指導を行なっております。南アの学校は日本の学校と異なり、校庭にもかかわらず坂や石があるなど、環境としてはあまりよくありません。しかしながら生徒たちは、それをものともせず裸足のまま大喜びで練習しています。菜園の収穫物を一部販売することで資金を得ている学校もありますが、基本的には自由に使えるお金がないようです。したがって、日本からのサッカーボールの寄贈については、どの学校からも感謝の言葉をいただいています。サッカーの魅力は国や地域を問わず、南アでももちろん、男子生徒も女子生徒も目の色を輝かせながら夢中になっています。

最後に、TAAAの原点である教育（図書支援）関係の報告がありました。日本から南アへは年に1回、商船三井様のご好意で数多くの英語の本を運んでいただいています。ダーバン港に到着した本は南ア事務所へ運ばれ、整理および保管されます。これらの本は移動図書館車に乗せられ、各学校を巡回いたしますが、今回届いた本は高校性向けの本が多かったようです。南アの地方の学校ではまだまだ本が不足していますが、本だけではなく、本棚や図書室が不足している学校もあります。そうした学校には、各種助成金からの支援などもいただき、本棚の設置や、コンテナ図書室の寄贈も進めています。英語の本はもちろんですが、ズールー語の本はさらに不足していることもあります。これらの本は購入したり、日本で英語の絵本にズールー語のシールを貼って届けていますが、特に喜ばれているようです。

報告会終了にあたり、平林薰から、「子どもたちの笑顔を見ていると、能力を秘めている彼ら・彼女たちに、できるだけチャンスを与える」いう率直な気持ちが語されました。どうぞ今後ともご支援・ご協力をよろしくお願ひいたします。

(丸岡晶)

[Page Top ▲](#)

2012-06-25 南アフリカ

西ケープ州エルギンからの移動図書館車運行レポート



TAAAは、毎年度末に、移動図書館車を寄贈した団体から移動図書館車プロジェクト報告書を提出してもらっています。

1997年に送ったバスを運行するエルギン学習基金（Elgin Learining Foundation 略名 E L F）から報告書が届きましたので簡単にご紹介します。

E L Fは、西ケープ州ケープタウンから車で約1時間半のところにある果樹園地域エルギン地区内にあります。1995年に設立されたこのNGOは、農業、教育、保健、小規模ビジネス支援と幅広く活動しています。

E L Fの移動図書館車は、ペインティングせずにずっと送った時のそのままの日本の姿で南アの果

樹園を走りまわっていますが、最近写真のようにペインティングされたようです。昨年度と比べ支援対象校が7校から9校ふえました。対象校のうち図書室のある学校は1校のみと、昨年から増えていません。 移動図書館車プロジェクトは10年以上になり、車両状況は万全とはいえませんが、大切に活用し、運行は定着しています。

2011年度移動図書館車プロジェクト報告

| | |
|--------------|-------------------|
| 対象地域 | 西ケープ州 エルギン、グロービュー |
| 対象校・生徒数 | 9校 577人 |
| 図書室のある学校 | 1校 |
| 移動図書館の学校巡回頻度 | 2週間に一回 |
| 移動図書館車用の蔵書数 | 2000冊 |
| 生徒に人気がある本 | 絵本、小説 |
| プロジェクトの問題点 | 教師たちの協力・支援が不十分 |

2011年度の主な進展

1. 図書館データベースをより利便性の高いSLIMSデータベースにアップグレード
2. Appletiserから移動図書館ファシリティナーに対し奨学金の給付（情報学・情報教育学学士号向けの奨学金3名分）
3. 西ケープ州教育省から新しい本約800冊を寄贈される

学校での読書推進の取り組み

西ケープ州の学校では授業外にリーディングの時間が必修となっている。この時間を利用して、教科書以外の教材を使用して読解力増強を図っている。西ケープ州ではすべての4~9年生は家庭で決められた冊数の読書や英語以外の本を読むことが求められる。この方針に従ってブックレビュー やディスカッション、読書記録を取る等の活動が行われている。これらの活動は読解力向上推進プロジェクトの一環として年度末に報告される。

対象生徒たちについて

50%以上が片親に育てられている。親の職業は、おもに農地労働者、家政婦。 退学率（小学生）は10%以下。退学の理由は、仲間からのプレッシャー、健康上の理由、家庭やコミュニティーの事情、教師との関係不良

(翻訳 上林潤子)

[Page Top ▲](#)

2012-05-21 南アフリカ

視察訪問記②



JICAの菜園活動を中心に今回、代表の久我祐子と事務局長の野田千香子がクワズールナタール州ウグ郡を訪問しました。TAAA南ア事務所代表の平林薰とスタッフのマイケルと共に学校を回りました。その中から、学校の図書館事情とスポーツなどについて、印象に残ったことをお伝えしようと思います。

★クワボンゴ小中学校（6歳～13歳位）では移動図書館からの本がとてもよく利用されているとのことを聞いて嬉しいでした。

先生方も借りて英語やズールー語の授業に使うとのことでした。図書委員会もあり、読書のコンテストも行うそうです。

しかし、図書室を見せてもらうと、教室位の広さがあって本棚もあるのですが、本は棚の所々に倒れそうに、少し置かれているだけです。日本から届いている児童書を平林が次回、この学校にも持参する約束をしました。

★インククコ小（小5～中1）を訪れた時は、昼休みでした。ここで50歳の実に力強い女の先生に出会いました。実は最初その先生を見た時、校庭で食べ物を置いた木箱の前に座っていたので、オヤツを売りに来たおばさんかと思ったのでした。

南アの学校には、昼休みに物売りのおばさんがよく、校庭に来ているのです。

しかし、そのかたは私たちを見ると、さっと教室へ案内してくれました。そこには子供たちが描いた大きな動物の絵が所狭しと、天井や壁いっぱいに貼られていました。圧倒される力強い作品群にびっくりしました。籠やマットなどのクラフトも天井から下げられていました。美術の先生の指導力に感服しました。

さらに驚いたのはこの先生の体力と気迫です。

私たちが持参したサッカーボールを先生に渡した途端に、先生は小6位の女子たちに向かって渾身の直球を投げました。ぎょっとするような直球を女の子はしっかりと受け止め、投げ返しました。続いて先生から第2球。。。

狭い校庭ですが、ネットのポールが2本立てられ、男子組と女子組に分かれて、すぐネットボールが開始されました。先生はいつの間にか、笛を口にくわえ、大きな動作で試合開始の合図をする。男子組には、頭一つ分、背の大きい生徒が3人もいます。小柄な女子組はその間を潜り抜けて上手にボールを運びます。

応援の甲斐なく、1点の僅差で男子に敗けてしまいましたが、実によく応戦し、将来を期待できる女子たちでした。大きな声と動作と笛で生徒を制する50歳の先生も、凄かった！頬らしい南アの生徒たちと先生でした。

（野田千香子）

視察訪問記①



5月3日～6日に現地視察訪問をしてきました。正味3泊4日の駆け足訪問でしたが、学校を中心とした充実した訪問になりました。

到着した日は、支援対象地域であるムタルマ地区の教育センターを訪問し、地域の青少年がかかえている問題やそれを改善すべく支援のあり方などを話し合いました。

南アの遠隔地域では、ほとんどの子供たちは、祖母に育てられています。様々な事情で親のいない子供が多く、祖母のわずかな年金に頼って暮らしています。センター長のフォロンガネさんの話によると、祖母も亡くなり、子供だけで暮らしている極貧家族もいて、彼らはレイプや犯罪にさらされやすい過酷な状況下で暮らしているとのこと。

ウグ郡は、広大なサトウキビ畑が奥地まで延々と続く地域です。サトウキビ畑に挟まれるようにしてある小丘や谷に、ぽつんぽつんと民家が点在しています。一見のどかにみえる遠隔地域ではありますが、ドラッグ、犯罪、レイプ、HIVに関連する様々な都市部で顕著な問題が浸透しています。そのような問題があることは認識していましたが、フォロンガネさんの話から、想像していた以上に問題が複雑化し深刻化していることが分かりました。

その原因を「貧困からくる悪循環」というフォロンガネさんは、「新政権になって民主化がやってきました。それ事態はいいことだけど、若者は、自由には責任が伴うことを知らなさすぎる。親や教師のいうことを聞かなくなりました。そのことも原因です」とおっしゃったので、「文化が変わったのですか」と聞くと、「文化は変わっていない。変わったのは態度です」。「文化は変わっていない」と断言されていたことが印象的でした。

次の日は学校訪問をしました。学校菜園プロジェクトでよく教師研修会場として使われるインプリメロ小学校（シニアプライマリー）を訪ねると、授業中に数人の生徒達が菜園で作業をしていました。「今はテクノロジーの時間で、この科目では2つのクラスに分かれて、1つのクラスは実践として菜園を使っています」といいながら担当のンソミ先生が菜園を案内してくれました。他の学校でも、畑は様々な授業に応用されています。インプリメロ小学校は、忠実にパーカルチャーを実践している学校です。とても熱心に取り組むンソミ先生は、週末も時々畑の世話を学校にくるそうです。生徒たち用にランチも持参して、学校の周辺に住んでいる生徒達にも来させて世話をさせているといっていました。

菜園プロジェクト校は、収穫物を給食の食材に使っていますが、余剰作物は、保護者などのコミュニティに売って学校や菜園の資金に充てたり、貧困家庭の生徒たちに持たせています。学校の先生たちは、生徒たちの家庭事情をよく把握しており、公平な判断でニーズのある家庭の生徒を選んで渡しているようです。

助け合いや分かち合いの精神はズールー人が大切にしている価値観です。

ンソミ先生は私たちを教室に案内してくれました。私たちの突然の侵入にかかわらず、高学年の生徒たちは熱心に授業に集中していました。畑からの収穫物がいくつか展示され、教材に使われていました。

次に訪れたのは、インプレメロ小学校よりもさらに奥地にあるワイルダー小学校。 ワイルダーはジュニアプライマリースクールといって、低学年までの生徒が通っています。ここの生徒たちは2時間くらいかけて通学する遠方からの子が多く、低学年にはかなりの負担になっています。 校長先生は、毎朝、遠方からの子供たちを車で送り迎えしてあげているそうです。

今回の訪問では、学校の先生たちが、学校での勤務以外に、自分の時間やお金を使って生徒たちをケアしている話をよく聞きました。 南アには「Any Child is My Child」という言葉があり、伝統的に子供を大切にする文化があります。 その言葉どおりの暖かい空気がこの地域の学校には漂っていました。

放課後になると、菜園クラブの男の子たちが、「俺たちの畠」とばかりに、威勢よく畠を耕していました。 慣れた手つきです。ワイルダーは、比較的最近菜園をはじめた学校ですが、家の周辺にメイズを育てている家庭の子供も多く、子供どうし教え合い学び合っているそうです。 菜園での生徒どうしの学び合いは、ワイルダー小学校に限らず、他の学校でも顕著に見られてきた傾向です。 担当教師も生徒から学ぶことが多いそうです。

地べたに座って仲良く自習をしている教室をそっとのぞいて、自然体の写真を撮らせてもらおうとすると、すぐに気付いて、さっと一列になってしましました。写真をみせると「ワー」と大歓声。もう一度そっと撮ろうとしたところ、またすぐに気づかれて瞬く間に力チカチの整列状態に。彼らの行動のすばやさには驚かされました。

右の写真は整列する直前の瞬間です。「あ、写真とるんだ！」 3秒後には、私の目の前で兵隊さんのように並んでいました。

(久我祐子)

[Page Top ▲](#)

2012-05-01 南アフリカ

地元の大工職人との出会い



図書支援対象校のうち、とくに設備の乏しい15校に本棚の寄贈を行いました。せっかく蔵書があつても本棚がないため本が山積みになっている学校もあり、学校での図書活動を開始するにはまず本を整理して本棚に納め、生徒が利用できる状態にすることが大切です。

本棚は地元の小さい工場で一点一点、心をこめて製造されています。工場長のバーナードさんはサトウキビ畠の丘の上に建つ古い教会の跡地を作業場に使っています。

教会はいつも通り過ぎる時に見ていて、“このあたりは昔、宣教師が来ていたのだな”と思っていたのですが、まさか家具作りの作業場になっているとはバーナードさんと出会うまでは知りませんでした。

バーナードさんは若者の自立支援にも熱心で、“地域の若い人たちに技術を学ばせて、地域内で自立できることを目指したい”“私は工業はもちろん、農業もしている。地域の若者には、自分の手で何かを作り出すことの大切さ、そしてそれが生活の糧となることを教えたい”“若者は若者同士で学び、仕事をし、活動するのがいいからね”というお話を伺いました。

自分がこれからも支援を続けて行きたい地域に、同じ思いを持った地域のリーダーがいたことと、思いがけない場所で彼と出会えたことをとても嬉しく思いました。

(TAAA南ア事務所 平林薰)

[Page Top ▲](#)

2012-04-18 南アフリカ

3年目に入った菜園活動



クワズールー・ナタール州ウグ郡で始めた菜園活動は3年目に入りました。

化学肥料や農薬を使用しない環境保全型の農業指導を続けています。一学期に1回、教師を対象とした菜園活動の研修会を開催していますが、畑で実習を行う際には、会場となる学校の生徒も参加します。生徒たちは飲み込みが早く、とても熱心に取り組んでいます。

左の写真はダブル・ディギングという、たい肥作りの方法を学んでいるところです。

中央の写真はワイルダー小の元気いっぱいのリトルファーマーたち。この学校はとても熱心で終業式の日にも菜園活動をしていました。夏の収穫を終えて次の葉物野菜の苗床作りをしているところです。

菜園活動は、コミュニティーにも広がり、根付いてきています。

右の写真は、ムシカジ・コミュニティー。キャベツが育っているところで、ジャガイモの植え付けも行われていました。年間を通して確実に収穫を得ています。それにしても、ここは本当に美しい地域で、まさに“聖地”という感じです。訪問するたびに心が洗われるようです。

(TAAA南ア事務所 平林薰)

[Page Top ▲](#)

2012-04-06 日本

石巻からいただいたお手紙



石巻市民で、ご自身も被災者でありながら、震災直後からずっと支援活動をしている佐々木智恵さんからお手紙をいただきました。ご紹介いたします。

アジア・アフリカと共に歩む会の皆様方へ

春のおとずれを感じながら、もうすぐあの大震災から一年一ヶ月がたとうとしています。

この一年、アジア・アフリカと共に歩む会の皆様方に、多大な御支援を賜りましたことを、友人、知人を代表して厚く御礼を申し上げます。

昨年の地震で、日本中が大変な中、皆様におかれましても、大変な思いをされていた方もいたのでは・・・と思うと、心があつくなりました。

皆様から送って頂いた真心の御支援は、私の友人・知人にも協力してもらいながら、たくさんの方々へ声掛けをし、津波で被害にあってしまったお子様がいる家庭を中心に、ご高齢でお孫さんがいる家庭、おいっこ、めいっこさんのいる家庭など、100を超えるご家族のもとへ届けさせて頂きました。

石巻を中心でしたが、石巻も数年前に地域合併として広くなってしまいました。市街地が主な届け先でしたが、牡鹿半島の鮎川という半島方面や、女川、また東松島市の大曲方面も甚大な被害をうけ大曲地区も住めない地域となりました。その方々にも避難されたところ、また、アパート、仮設などに行きました。広くは仙台方面の浸水した地域の方々にも届けさせて頂きました。

牡鹿半島の鮎川という所より、もう少し先に、新山浜という地区があります。この地区は、金華山という島に守られ海の津波被害は少なかったのですが、地震の震源地にとても近かった為、山がくずれ山津波が発生し、孤立した地域でした。普段はあまり使う方も少ない山道も、抜け道をさがしながら当時は使っていたそうです。新山浜地区にご家族を持つ方が石巻にいました。道路は危険な所が多いということで、その方々が帰る時などに届けて頂いた事もあります。2月にだいぶ道が良くなったとの事で行ってみましたが、いまだに危険な道を通じて地元の方々は暮らしているのだと改めて思いました。

お子さんのいる家庭はだいたいが高台にある仮設で暮らしています。必要な物なども、どこの家庭でもひとつおり落ち着きをみます。

しかし、3・11を前後に、心の中にかかえてしまったそれぞれの思いが暗くかげをおとしています。先月、ある中学校の校長先生にお会いする機会があり、お話をうかがいました。震災から一年をむかえ、色々なところから、メディア・マスコミがくるそうです。中学というところは、年代的にも重要で、この震災の中、受験にいどむ生徒さんもいらっしゃいました。

メディア・マスコミの方々は、仕事としてとらえてくるので、被害にあった方々の心によりそうのではなく、まるでイベントのような感じでみえたそうです。

「子供達は、小さな仮設でまわりに気を使いながら、大人達の会話を聞き暮らしているそうです。子供と大人の間の年齢で、いろいろなものをずっしりとせおって、朝登校してきているんです。そ

の子供達を守る為に取材は断った」と言っておられました。

たくさんのお話の中の一部で、皆さんに伝わるかどうかと思いながら書きました。心の復興が大きな課題です。

私をふくめ地元や地元近くで暮らす人々はまだ、少しでも話す人や心の悩みを理解しあえる人がいますが、福島から避難して暮らしておられる方々を思うと、本当に心が痛みます。同じ原発をかかえている地域の一人として、考えさせられる事や、心のおき場所や、いろいろと思うと、年せいが涙がとまりません。

同じ東北の友として、何か心によりそえる様な事が出来るなら・・と思います。

これからも地元、石巻が中心になるかとは思いますが、支え支えられながら、心の復興を皆さんと共に絆という虹の橋築き上げていきたいと思います。

長文になり、また文書作りがにがてなため、読みづらかったらすみません。長文を読んで頂き、ありがとうございました。

季節の変わり目ですので、体調に気をつけてがんばって下さい。

佐々木智恵

[Page Top ▲](#)

2012-03-29 南アフリカ

給食と学校菜園



南アの地方の学校では給食が一日のメインの食事という子供が少なくありません。朝食をとつて来ない生徒が多いため、ランチは早め（10時半ごろ）に始まります。給食室などの設備がなく、多くの学校では外でまきを使って煮炊きをしています。

基本的なメニューは曜日ごとに決められています。材料は生徒数に応じて業者が配達するようになります。給食の中身はかなり改善されましたが、まだまだ栄養面でも不十分です。

キャベツやホウレン草、ニンジン、じゃがいもなど菜園に収穫がある時は、その日使う分を畑からとってきてスープの中に入れることができます。栄養価がぐっと高まります。

給食制度は以前は小学校のみでしたが、昨年より地域限定で高校でもランチが提供されるようになりました。給食改善の面からも、菜園活動は実質的な効果が大きいことから、学校菜園作りの必要性がますます高まってきています。

右の写真は、農業専門家、リチャード・ヘイグ氏がンシャルワネ小のムカディ先生に指導をしているところ。ンシャルワネ小は担当教師だけでなく、他の教師も菜園活動に大変興味を持っていて、学校全体で熱心に活動を進めています。同校では3月15日には保護者へのワークショップも行い、学校周辺でコミュニティーへの活動の広がりも見られるようになりました。

2012-03-05 南アフリカ

高校に図書室を作りたい！



日本からの荷物は無事に倉庫に運び込まれました。

今年は、12,800冊の英語の本、751個のサッカーボール、150本の縄跳び、52個の算数セットなどが届きました。

ご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。早速、各地の学校へ配り始めました。

先日かわいい生徒の写真をお送りしたので、今回はちょっと大人っぽい高校生の写真をお送りします。ブンガシェ地域のベカメヴァ高校の生徒たちに本とサッカーボールを届けた時の写真です。

男子は高校生でもサッカーボールを持つと子供みたいな笑顔になりますね。

本を受け取ったのは圧倒的に女の子たち。

先生も箱を開けた途端、ペーパーバックを手にとって“早速読もう！”と大喜びでした。その中に混ざって、一人読書が好きそうな男子生徒がいました。難しそうな本を手にとってニヤリとしていたので、“Enjoy!”と声をかけると静かに頷いていました。

この時、“この生徒のためにだけでももっと本を持ってきてあげたい。図書室を設置してあげたい”と強く思いました。

南アの地方で高校まで進む生徒はきわめて優秀です。しかし、高校にさえ図書室がありません。この状況を少しでも改善していきたいです。

(TAAA南ア事務所 平林薰 編集：久我)

2012-02-16 日本

2月12日梱包作業＆ミニ講座のご報告



2月12日 梱包作業とミニ講座の報告

梱包作業

英語の図書、サッカーボール、文具などの南ア向け再梱包作業を行ないました。昨年10月にコンテナーで出荷した作業場は一旦、がらんと空きましたが、この3か月余りで、また、段ボールの山ができつつあります。

小さい子ども用、中高生用などとできるだけ分類して箱詰めします。北爪さんは自宅で受け取った本をトランクに積んで皆より1時間半も早く到着して仕事を始めていました。遅刻の人、早帰りの人・・・皆忙しい中からの参加です。

しかし、ボランティア皆の総力で、作業が捗っていきます。東北の被災地へ送る荷物は高野さんがまとめました。

ミニ講座

森さんが昨年11月にカンボジアを訪問。参加した4大学で行った子供たちとのサッカー交流報告をしました。ポルポト政権時代の後遺症は、深く人々の生活に影を落としています。知識人がほとんど虐殺され、教員や医師などが決定的に足りません。学校の校舎ができても教師が不足。

そうした状況下で、子どもたちへのサッカーボールのプレゼントは、子どもたちの生きる希望にもつながっているようです。「自由南アフリカの声」の58号にも概要が掲載されています。

その他、茂住さんが今月、福島・石巻にも行きたいのでメンバーでの同行者を募りました。

以上

(TAAA事務局 野田千香子)

[Page Top ▲](#)

2012-02-15 南アフリカ

ワイルダー小のサッカー戦士たち



サッカーボールは生徒数を考慮して一校当たり10-18個の寄贈を行っています。

先日、ヒバディーン地域のワイルダー小に届けました。この学校はジュニアプライマリーでグレードRから4までなのですが、菜園活動も図書活動も活発で、先生方ともすっかり顔見知りになって、ンドウェドウェ地域のズバネ小みたいな親密な関係が作れるかな、と思っています。

男の子たちはグレードRと1年生なのですが、みなすごい運動神経です！特に先頭を走っている子は、ボールを渡した途端、シャツを脱いでやる気満々。動きが違いました。

女の子はネットボールに使うみたいです。

2012-01-28 南アフリカ

中1の女の子の詩“Let's heal the world”



前期に、学校菜園プロジェクトをしている学校を対象に“菜園と栄養”に関する詩と絵のコンテストを行いました。たくさんの応募作品の中から、ヒバディーン地域インプレメロ小7年生（中学1年生）の女子生徒ザネレ・ムゾベさんの詩“Let's heal the world”（[オリジナル](#)）が最優秀賞に選ばれました。ザネレさんは、詩を通して、しなやかな感性で“土壤、自然を守ろう”と訴えています。

ザネレさんの詩をご紹介します。

Let's heal the world

By Zanele Mzobe Grade 7 Impumelelo Senior Primary

I am the soil. I am the top covering of the earth and under every step you take.
Will you please listen to my story before I completely disappear?

My body is like a big warm blanket wrapped around the earth. I have many different textures from gritty to silken soft. Imagine all the different shades of brown, yellow, red and black and you will know a part of me.
I am a home for seeds and plants. Plants get their water and nutrients through me. In my layers there are tiny organisms which are necessary for my fertility, breaking down humus and making pathways for air and water.

Every person on earth needs enough food to eat every day. So I do. Food is dependent on me. Besides food, people also grow plants and trees that produce medicines, coffee, tea, sugar, grapes and apples.

You need me. I need you to look after me. I take lots of time to make and you can destroy me in a minute. Please help me so that I can produce healthy vegetables and fruits for you.

There are many people on the earth and the population is growing. Much of me have been lost by erosion. Yet there is still time to secure me before I get swept away completely. You could use different techniques of farming which strengthen me slowly and surely.

世界をいやして ザネレ・ムゾベ（インプレメロ中学1年）

わたしは土。地球を包み、あなたが歩む下にある。
わたしが消滅してしまう前に、わたしの話を聞いてほしいの。

わたしの体は、地球を包む大きなあたたかい毛布のようなもの。
ざらざらなものからなめらかなものまで、いろいろな生地がある。
茶色、黄色、赤や黒の混ざったさまざまな色合いを想像してもらうと、わたしのことが少しづかつ
てもらえるかしら。

わたしは種や植物の家。
植物は、わたしを通して、水や栄養を得ている。
わたしの中のとても小さな微生物が、わたしを肥沃にし、腐植土をつくり、空気や水のための小道
をつくる。

地球上のすべての人は、毎日食べるのに十分な食料が必要だ。
だから私がはたらく。食料はわたしに依っている。
人々はまた、薬やコーヒー、お茶、ぶどう、りんごを作る樹木を育てる。

あなたはわたしが必要。わたしは、世話をしてくれるあなたが必要。
わたしができるまでには長い時間が必要だけれど、瞬く間にこわされてしまう。
どうかわたしを助けて。
そうすれば、健康な野菜や果物をあなたのために作ることができる。
土壤流出で、わたしの多くが流されてしまった。
でも、すべてが流される前に、わたしを守る時間はまだある。
ゆっくりだけど確かにわたしを強くするさまざまな農法を使ってほしい。

(訳 津山直子)

(平林)

[Page Top ▲](#)

2012-01-21 日本

TAAAの新しい仲間を紹介します!



私がTAAAの活動に参加させていただいたきっかけは、THAN球プロジェクト代表の森直之さんのTAAAでの活動を耳にしたからです。 森さんは“サッカーを通じて南アの子どもたちを笑顔に”を胸に活動をしています。 その森さんの背中を見て、自分にも何かできることはないかと思いTAAAに参加させていただきました。

TAAAスタッフの方々は南アについての知識が豊富で多方面からそれぞれの問題意識を持っていらっしゃるので、勉強になることばかりです。 南アの子どもたちのために、今の自分にできることをする。 私は南アに行き、この目で現状を知り、その先に見える課題を少しでも多く解決していきたいです。

また、人の出会いを大切に、活動に参加させていただきたいと思っています。

よろしくお願いします。

(横山礼)

[Page Top ▲](#)

2012-01-13 日本

1月8日にTAAA報告会を行いました



1月8日（日）に浦和コミュニティ・センターにて、TAAAの報告会を行いました。

第一部はTAAA南ア事務所代表でプロジェクトマネージャーの平林薰が、クワズールーナタール州ウグ郡の3地域で展開している菜園プロジェクト・図書支援プロジェクトを、動画を流しながら紹介しました。

図書館も書店もない遠隔地域で図書活動をすることの大切さ、子供たちの知識や能力を高める本の力が、嬉しそうに本にふれている子どもたちの姿を通して伝わりました。

【第一部講演内容】

「一つの国に世界がある」といわれるほど多様性が魅力的な南アフリカだが、アパルトヘトの痕跡は今もいたるところにあり、さらに昨今の経済格差拡大が一般の人々を苦しめている。最近の経済統計によると就労人口の60%が仕事に就いておらず、そのような背景から、犯罪や一攫千金を狙った麻薬が蔓延している。年々増加する若者の失業率を懸念する教育省は、高校卒業者および中退者のスキル習得を重要課題としている。

TAAAは、JICAパートナー事業として、クワズールーナタール州ウグ郡内の3地域（ヒバディーン、ブンガシエ、ドゥドゥドゥ）の30校を対象に菜園プロジェクトを行っている。

川のないドゥドゥドゥ地域では、灌漑用水の水の確保が大変で、山がちなブンガシエ地域は、雨天日は山道が非常に危険になるなど各地域に難点がある中、プロジェクトは概ね順調に進んでいます。

学校菜園の主な目的は、給食の充実化、基礎的な菜園技術の習得、意識改革の3つで、小学校の時に土いじりを楽しむことで、技術習得だけではなく、農業に対する健全な気持ちが育つ。これが将来的には地域における菜園・小規模農業の発展につながる。

農業専門家によるワークショップを年4回開き、「菜園と栄養」というタイトルでコンテストを行うなどして、菜園を通して、食の安全、栄養、環境、保健など技術以外の様々なことを生徒と教師に伝えている。

図書支援に関しては、対象校のほとんどは図書室がないため、移動図書館車が非常に有効で、どの学校でも図書は大変喜ばれている。移動図書館車は、1学期に2回学校間を巡回するが、悪天候の時は道が悪くなりとても大変だ。

子供たちの「本が読みたい」に応えて、長期のクリスマス休暇用に本を貸し出した。

第二部は、南アNGO「ウムトンボ」職員のサンディーレ・ムカディ氏（中央写真）が、サーフィンを通したストリートにいる子どもたちへの支援活動について講演してくれました。

ウムトンボの活動内容だけでなく、ストリートでのシンナーの売買など子供を巻き込む社会問題も

分かりやすく伝わりました。ムカディ氏の「最初からストリートにいる子供はいない。やむをえない事情があつてストリートにいるだけ。だから彼らはKids from Streetではあるけど、Street Childrenではない」という言葉がとても印象的でした。アパルトヘイト時代は、黒人には地元の海で泳ぐという当たり前の権利が剥奪されていました。それを思うとサーフィン南ア代表に選ばれたシモ君の勇姿（写真右）には、感無量になりました。

【第二部講演内容】

大都市ダーバンにある、ストリートチルドレンを保護・支援しているNGO「ウムトンボ」は、アート、サッカー、サーフィンなどのアクティビティや身心のケアを通して子どもたちを矯正し、少しずつ家庭や学校に戻す活動をしている。

センターでは、ストリートにいる子どもたちを保護し泊まらせている。歯磨きなどの身支度を教え、健康的な食事を提供し、ソーシャルワーカーを常駐させケアをしているが、ストリートにもどってしまう子供もいる。危険なストリートに戻ると悪事に巻き込まれるため、サーフィンをする子供には、なるべく長時間ビーチにいさせるように努力している。

自分は2008年からサーフィンを指導しているが、少しずつ活動の成果を実感している。サーフィンの教え子の2人は海水浴場のライフガードの職を得た。シンナー漬けだった少年がサーフィンを始めてから、見違えるように健康になった。5人の子供が、サーフィン協会から奨学金をもらい学校に戻った。厳しい家庭環境下、サーフィンをずっと続けてきたシモ君が、補欠ではあるが、黒人で初めての「サーフィン南アフリカ代表チームUnder 16」に選ばれた（右写真）。

子供たちの自尊心を育てるために、賞状やメダルをあげる機会をできるだけ多くしている。彼らが家や学校に戻ったときに賞状があると、「やっかいな子供」としてではなく、何かを達成してきた子供として、暖かく誇りをもって迎えてくれるので、受賞の品はとても大切だ。

第一部と二部をはさんで、「動く→動かす」代表の津山直子さんより、昨年10月11日に行われた「石巻国際祭り」の様子が動画で紹介され、震災後、命に関わる保健分野のODA額が削られる中、「国際協力と復興のどちらが優先ということではなく、両方大切という認識を持つべき」という力強いメッセージを送ってくれました。

(久我)

Page Top ▲

2012-01-10 日本

石巻に本・ランドセル・人形を送りました

大変遅くなりましたが、あけましておめでとうございます。

今年も私達「アジア・アフリカと共に歩む会」は、南アフリカの子どもたち、そして国内の被災地の子どもたちのために、出来ることをしていきたいと思っております。

どうぞよろしくお願ひいたします。

年明けに、石巻市民で震災直後からずっと支援活動をしている佐々木智恵さんに、ささやかな支援金とダンボール2箱の物資を送りました。送ったものは、絵本約70冊、ランドセル1個、手作りのお人形数個です。お人形は、福岡県の人形作家の方が「被災地の子供やお年寄りの心が少しでも安らぎますように」とTAAAに寄贈して下さったものです。絵本は全国から寄せられました。ご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。

佐々木智恵さんの話からは、災害のトラウマに苦しむ子どもたちの姿が浮かんできます。恐ろしい

津波とそれによる被害を見てしまった子どもたちの中には、水恐怖症になり、お風呂にずっと入れず、年末あたりからやっとシャワーを浴びたり、お風呂に入れるようになった子供もいるそうです。「これからは心のケアが大切だ」と佐々木さんは何度もいっていました。

また、仮設住宅に住む子どもたちは、瓦礫だらけの道を1時間もかけて通学するために、親が付き添わなければならず、働いているお母さんには大きなストレスになっているといっていました。新年になってようやく仮設住宅児童用のスクールバスが手配されたようです。子供の安全にかかることなので、スクールバスはもっと早く手配してほしかったと思います。

今年もTAAAは「本とお友だち」キャンペーンを続けてまいります。
皆様のご協力をお願い申し上げます。

(久我祐子)

[Page Top ▲](#)